



# 寺報 ともしひ

金剛山大長寺  
令和三年四月二十三日発行  
第十四号

## わが願い

住職 安藤 康哉

生まれて幼少のころまで  
神童といわれる筈もなく

やがて ただの人から

路傍の石「人」となつて

誤解や非難 嫌悪のなかを

踏まれ踏まれて生きていく

混沌 無情の世相を嘆いては

演歌に涙し 叙情歌に想いをはせる

けれども いつの日か千の風に

千の風になつて悠々自在に

大空を吹き渡りたい

吹き渡りたい



今年も豊かな実りを約束するかのようにマンサクが美しい、  
康哉師の笑顔がほころぶ

# 「残心と禅」

大長寺院代  
安藤 嘉則

日本の芸道、特に武道において「残心」ということが強調されることがあります。これは、最後の最後まで心が途切れるごとなく注意を払うことを意味します。

たとえば弓道では射法八節という弓を射る八つの型がありましたが、その最後の八番目が「残心」です。これは一連の動作を経て、矢を放ちますが（第七番目の「離れ」）、放った後も、自身ともに姿勢をくずさず、気合いのこもつたまま、視線は放された矢の着点を見据えることであるとされています。

## 特別志納者の紹介

を緩めず相手の反撃に対応できる身構えをくずさないことを残心とし、この残心がないと試合で技が決まつても有効とされません。

たとえば、一本を取つてガツツボーズなど、歓喜してはしゃいだりすると、残心がないとみなされ、一本が取り消しになることがあります。これは弓道でも同様で、的中してもそれが取り消しになることもあります。

しかし一方において、私たちがふだんテレビで楽しむスポーツはいかがでしょうか？ サッカーや野球、格闘技など、ゴールを決めたり、ホームランで勝利したり、対戦相手をKOしたときには、ガツツボーズをはじめ

め、喜びの感情をそのまま体で表現しています。ある意味で日本の伝統的な武道と現在のスポーツ競技とは、その最後のシーンにおいて対照的です。

かつて大相撲において横綱朝青龍が白鳳との優勝決定戦で勝つたとき、思わずガツツボーズをとつたことで、横綱審議会で問題となり、世間でも取り上げられたことがあります。ちょうどそのとき私は大学でモンゴル人の院生を二人指導していたので、このことを話題にして話し合いました。するとモンゴルの院生たちは、モンゴル相撲などを小さい頃から見てきたこともあり、大切な一番に勝利したことを素直に身体で表現する方が人として自然ではないか、日本

の感情を押し殺す文化に疑問止めがあると思いますが、一つには、自らの勝利は相手がつての栄誉であり、勝利に驕らず、対戦相手への敬意、感謝の念が、このことで思い出されるの



城川どろんこ祭（愛媛県西予市）

が、スポーツ新聞で巨人軍の担当記者が、前人未踏の八六八本のホームランを打った王貞治選手を回想した記事です。細かな内容は忘れましたが、そのスポーツ紙の記者は、王貞治選手がホームランを打つても直接喜びを表すこともなく、いつも淡々とベースを回っていたことに対するなぜもつと感情を出さないのかと聞いたそうです。すると王選手は、高校時代、甲子園での試合でホームランを打ったとき、そのうれしさを爆発的に表したところ、お父さんから「打たれたピッチャーの気持ちを思え」と激しく叱られたから、といったそうです。王選手が自らのホームランで喜びの感情を表したのは、八五六本目で世界記録を抜いたときに万歳をしたときの一度だけだそうです。いずれにしても、王選手が高校時代に受けた父の教えを生涯にたって大切に守っていたことに

球における「残心」の一つのかたちではないかと思います。なお、武道の残心には、真剣勝負において、「勝った」と思って、歓喜して油断をして隙をみせると、相手の最後の余力で打たれてしまうということで、最後の最後まで気を緩めないと意味もあるそうです。

ところでこうした武道の世界だけでなく、茶道などの芸道でも残心ということがいわれます。たとえば桜田門の変で知られる井伊直弼は、一流の茶人として知られており、茶道の心得を示した「茶湯一會集」を著しています。この書物において大変有名な「一期一會」という言葉を残しています（一期一會は直弼の言葉です）。また、この書には「余情残心」という言葉がみえます。これは茶をもてなした客人を見えなくなるまで、

心打たれました。私はこれも野球において、「残心」の一つのかたちではないかと思います。なお、武道の残心には、真剣勝負において、「勝った」と思って、歓喜して油断をして隙をみせると、相手の最後の余力で打たれてしまうということで、最後の最後まで気を緩めないと意味もあるそうです。

根清涼寺（曹洞宗）において参禅し、仏洲仙英（清涼寺二三世一八六四年寂）の下で印可を受けたといわれるほど、禅を極めた人でした。こうした曹洞宗の



茶室に戻り、茶をたてるのです。そして、客人と過ごしたひとときが一生に一度の出会い（一期一会）であつたことを思い、そ

昔、京都の禅寺で修行道場にうかがつたとき、帰りの挨拶を山門で挨拶をして100m以上も歩いて振り返ったとき、その修行僧は当方に向かつて合掌し続けていました。曹洞宗では大事な客人に門送する儀があります。たとえば雲水さんに私も思わず合掌で返しました。曹洞宗ではこのような伝統は今も続いているのです。

この井伊直弼をはじめ、千利休や武野紹鷗らの茶人たちも大徳寺の禅僧に参じ、また柳生流の祖、柳生宗矩は沢庵宗彭に参じて、新たな芸道の境地を開いています。

こうした禅僧たちと芸道のキー・ペーソンたちとの結びつきが、日本文化の奥行きを広げ今まで至っているのです。

# ご逝去の方々と命日

## 本当の自分とは？

副住職 岩藤道隆

毎年、大長寺で行われております「施食会」につきまして、今年は、地区ごとに時間をずらして、計5回に分けて開催いたしました。

本堂内で着席することはせず、読経中、本堂前に設置した「施食棚」にてご焼香をいただき供養形態といたしました。

新型コロナが流行してから、一年以上が経過いたします。ちまたでは、飲食店が悲鳴をあげ、病院や、介護施設では、家族との面会も許されず、入居者は、寂しい思いを余儀なくされております。

私達の生活の営みは、人と人との「つながり」によつて成り立つております。従来は、物理的、物質的なつながりが重視されてきましたが、心と心のつながりがいかに大切であると改め

て認識させられた一年であつたと顧みます。亡き人を想う気持ち、先祖をからいたただいた命に感謝する気持ち、そこに、本当の意味での「自分自身の心の在り方」を探求すべき答えがあるのだと確信するのであります。



昨年の施食会は檀信徒が一堂に会しました。今年は地区毎に時間をずらして実施致します。